

## 編集後記

新世紀の夜明けから早1年が過ぎてしまった。誰しもが平和な時代の到来を願っていたにもかかわらず、政治・経済の混乱や人種・宗教間の対立など、未だに争いに明け暮れる地域が少なくない。地球の裏側で突発した衝撃的な「テロ」が映画のシーンの如く茶の間に飛び込んでくるというメディアの進歩は、我々の「平和ボケ」した意識構造を粉碎してしまった。無知と貧困から殉教・自爆、報復・殺戮などにはしり、人命が紙屑の如く消耗される状況は、増悪に包まれた相互不信感にみなぎり、絶望的な状態ともいえよう。人類の進歩によって種々の多様な文化が形成され、隣人との相互理解によって社会は成り立ってきた。指導者は利害を乗り越え、多様性を相互理解し未来を見つめた強い指導性を発揮して、早急に「美しい地球と平和を守るルール」を示してほしいものである。

昨年、本学会の存在を根底から問いただす極めて重要な問題が生じた。学会と構成する大学・研究機関における研究活動の閉鎖性など、長年に亘る「学会・大学の常識」が「世間の常識」とは解離したものになっていたことをあらためて知らされた。この意味でも「研究ボケ」した「井の中の蛙」的研究者の意識構造を粉碎する事件であったといえよう。個人・個々の施設の問題とすることなく、学会としての危機管理意識を構築する事が急務といえ改革の方向性が実践されている。

偏った情報操作によって故意に意識構造が形成されることに注意を要する。メディアの功罪を意図的に利用するもの、噂・風評が独り歩きして「火のない所に煙をたてる」もの、手痛いしっぺ返しを食らうことを前世紀前半に我々日本人は学習した。しかし、科学論文では事実・結果に情報操作があってはならないし、操作を行えば論理の展開が破綻する事になる。編集委員として任期満了に近ずき、この編集後記が最後の担当となる。多くの貴重な労作を読ませて頂いた。個人的には大変に勉強になったが、果たしてどの程度お役にたったのか些か自信がない。本誌が「真摯で白熱した討論の場」を提供するとすれば、レフリー役の編集委員による批判には「馬耳東風」であってはならない。地道な研究活動、若い萌芽的研究、更には埋もれた貴重な臨床経験や症例が、「汲めども尽きぬ泉」の如く展開される場として、本誌は機能してゆくことであろう。「馬」年にあやかって更に大きな飛躍発展の節目であることを願っている。

(今泉 俊秀)